

詩的身体

判有明昇

物語の中に回収されない

身振りとは――

11/ **26** (土) 新潟大学附属図書館 ライブラリーホール
18:30 「ショットムービー」上映会
21:00 作品1「八月対談録」 作品2「変奏」
アフタートーク

27 (日) 新潟大学附属図書館 会議室
13:30 研究発表
15:30 蔣雯 (映像メディア学) | 東京工芸大学芸術学部助教

映画における詩的身体にアプローチする演出法と演技法
――「ショットムービー」制作を巡って

長谷川 祐輔 (哲学) | (株) Plum Studio 文芸事業部代表

ワークショップ映画とミメーシス
――「ショットムービー」における俳優の創作論

参加申込フォーム

■ 入場無料 ■ 制作代表：蔣雯 プロデューサー：長谷川祐輔、矢野靖人 俳優：富高有紗、綾田将一、aqiLa、桐葉恵、川渕優子
プロット：長谷川祐輔、蔣雯 撮影：呉楽 編集：董敬 Special Thanks：井上明日香、Ash、千成不動産、アートアクセスあだち
音まち千住の縁 ■ 本作品は、東京都、アーツカウンシル東京、一般社団法人 shelf 共催アートプロジェクト「東京で(国)境をこえる」
により制作されたものです。

イベントに関するお問い合わせ先：阿部ふく子 (新潟大学人文学部准教授) f.abe@human.niigata-u.ac.jp



事前登録なしでもお越し
いただけますが、準備の
都合上、できるかぎりご
登録をお願いいたします。

ここにはなくていいものがたくさんある。
ショットムービーは、映画俳優の稽古場にもなると思う。

—— 蔣 雯 (上映会アフタートーク @東京工芸大学)



タイムテーブル (目安)

11/26(土)

上映 (50分 × 2作品)

アフタートーク (30分)

※途中休憩あり

11/27(日)

研究発表 (60分)

質疑応答 + ディスカッション (50分)

※途中休憩あり

ゲスト



蔣 雯 (ジャン・ウェン)
東京工芸大学芸術学部映像学
科助教
「ショットムービー」制作代表
俳優



長谷川 祐輔
(株) Plum Studio 文芸事業部代表
「ショットムービー」キュレー
ター

ショットムービープロジェクト・作品紹介

「意味をこえる身体へ：ショットムービープログラム」(以下「ショットムービー」)は、2021年から本格的に始動した共同制作プロジェクトである。「ショットムービー」とは「ショット (shot)」と「ムービー (物語)」を組み合わせた造語であり、映像作品における最小単位としての「ショット」と、複数のショットが連なることから生じる物語の緊張関係を問いなおす実践を主な活動の目的としている。

ショットムービーの制作法は、制作側の意図を反映した脚本や物語を事前に作り込んで、俳優がそれらを実現するために動くという階層秩序的なものではない。そうではなく、このプロジェクトの制作法において重視しているのは、役としてではない俳優の個人的な身体性や、制作側と俳優のインタラクションを重ねることで生まれる言葉や状況の変化を脚本に織り込んでいくといった、制作・俳優・技術スタッフたちによる共同性である。今回上映する2つの作品「八月対談録」(2021)と「変奏」(2022)は、どちらも以上のような方法に基づいて制作された。

なぜそのような制作手段を取り入れるのか。それは、このプロジェクトがひとつの作品を作り上げることに留まるのではなく、プロジェクトメンバーそれぞれの個性を浮かび上がらせることを目指しているからだ。人間の個性は、外部から与えられた指示や固定化された装置(脚本・身振りなど)から逸脱する時においてこそ偶発的に表出される。

このプロジェクトを貫いているコンセプトのひとつに「距離」がある。これは作品の主題であると同時に、撮影の条件や参加者同士の現実にも響いている。たとえば、作品1「八月対談録」の制作にあたっては、俳優と制作者は一度も直接会っていない。すべて、zoomや自撮りやSNSなどの遠隔技術を使って撮影されたものである。遠隔での制作をふまえた上で、作品2「変奏」は、すべて対面で撮影された。作品1から作品2への移行において見出されたのは、実際に会うことそのものによって生じる質やリアリティであった。これらは、一定期間遠隔に限定してそれなりに密なコミュニケーションを取った相手と実際に会ったときに生じる、身体的な質感(親密さ、緊張感、ぎこちなさなど)と言えるかもしれない。

人と人の距離は、つねに変数としての余白を含んでいる。たとえば過ごした時間が長い相手とのあいだには親しさや信頼関係が生じることもあれば、たったひとつの否定的な出来事によって築かれてきた関係性が崩壊することもある。人間関係における距離の余白は、関係性をつくと同時に壊す可能性を内包している。そして、現代では距離感における否定的な側面が強調され、親密さを生成するような関係性よりもどちらかと言えば単純化したやりとりが増えている。しかし他者との関係性においてトラブルを回避しようとコミュニケーションを平板化することは、同時に創造性を回避することにもつながる。

ここまで述べた制作の狙いやコンセプトが作品においてどれほど実現されているのかは、制作側が一義的に提示できるものではない。それは観客が参加することではじめて輪郭を持つ。今回の上映会が、映像と観客が出会う機会になれば幸いである。

会場案内

※お車で越しの方は旧正門からお入りください。



参加申込

フォーム

事前登録なしでもお越しいただけますが、準備の都合上、できるときご登録をお願いいたします。



イベントに関するお問合せ先

阿部 ふく子 (新潟大学人文学部准教授)
f.abe@human.niigata-u.ac.jp

長谷川 祐輔